

2 四類感染症の発生動向

1) 四類感染症の患者情報

2023年の埼玉県及び全国の四類感染症の届出数を表 I-2-1 に示した。

表 I-2-1 四類感染症の届出数 (2023年)

疾患名		埼玉県	全国*
四類	E型肝炎	43	552
	ウエストナイル熱(ウエストナイル脳炎含む)	-	-
	A型肝炎	3	56
	エキノコックス症	-	14
	エムポックス	5	225
	黄熱	-	-
	オウム病	1	8
	オムスク出血熱	-	-
	回帰熱	-	23
	キャサヌル森林病	-	-
	Q熱	-	1
	狂犬病	-	-
	コクシジオイデス症	-	4
	ジカウイルス感染症	-	2
	重症熱性血小板減少症候群(SFTS)	-	134
	腎症候性出血熱(HFRS)	-	-
	西部ウマ脳炎	-	-
	ダニ媒介脳炎	-	-
	炭疽	-	-
	チクングニア熱	-	7
	つつが虫病	3	445
	デング熱	9	175
	東部ウマ脳炎	-	-
	鳥インフルエンザ(H5N1及びH7N9を除く)	-	-
	ニパウイルス感染症	-	-
	日本紅斑熱	-	500
	日本脳炎	-	6
	ハンタウイルス肺症候群(HPS)	-	-
	Bウイルス病	-	-
	鼻疽	-	-
	ブルセラ症	-	2
	ベネズエラウマ脳炎	-	-
	ヘンドラウイルス感染症	-	-
	発しんチフス	-	-
ポツリヌス症	-	-	
マラリア	2	36	
野兔病	-	-	
ライム病	1	28	
リッサウイルス感染症	-	-	
リフトバレー熱	-	-	
類鼻疽	-	-	
レジオネラ症	112	2,291	
レプトスピラ症	-	49	
ロッキー山紅斑熱	-	-	

*全国は診断週(1~52週)の集計値 (-0)

埼玉県に届出のあった四類感染症は、E型肝炎43人、A型肝炎3人、エムポックス5人、オウム病1人、つつが虫病3人、デング熱9人、マラリア2人、ライム病1人、レジオネラ症112人の計179人であった。

ア E型肝炎

男性 34 人、女性 9 人の計 43 人の届出があり、前年の 35 人より増加した（図 I-2-1）。症例の年齢は 9 歳から 80 歳代に分布し、50 歳代が 14 人で最も多く、次いで 60 歳代が 11 人であった（表 I-2-2）。類型は患者が 37 人、無症状病原体保有者が 6 人で、診断方法は PCR 法による病原体遺伝子の検出及び血清 IgA 抗体の検出が 11 人、PCR 法による病原体遺伝子の検出のみが 4 人、血清 IgA 抗体の検出のみが 28 人であった。推定感染経路は経口感染 25 人、不明 18 人で、推定感染地域は国内 40 人、不明 3 人であった。届出は年間を通して確認され、無症状病原体保有者の 6 人のうち 5 人は献血、1 人は定期健診により探知された症例であった。

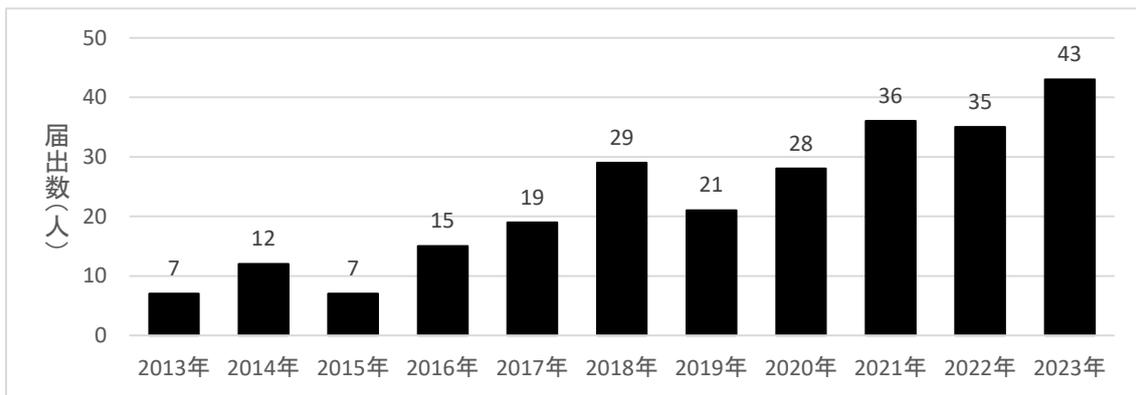


図 I-2-1 E型肝炎 届出数（2013 年～2023 年）

表 I-2-2 E型肝炎 年齢階級別届出数

年齢階級	総数	男性	女性
10歳未満	1	-	1
10歳代	-	-	-
20歳代	-	-	-
30歳代	1	1	-
40歳代	7	7	-
50歳代	14	10	4
60歳代	11	11	-
70歳代	7	4	3
80歳代	2	1	1
90歳以上	-	-	-
合計	43	34	9
割合	100.0%	79.1%	20.9%

(-:0)

イ A型肝炎

女性3人の届出があり、前年と同数であった(図I-2-2)。類型は全て患者で、症例の年齢は10歳未満、20歳代及び50歳代が各1人であった。診断方法は血清IgM抗体の検出のみが1人、検体から直接のPCR法による病原体遺伝子の検出及び血清IgM抗体の検出が2人であった。推定感染経路は、経口感染が1人、不明が2人で、推定感染地域は国内が2人、国外が1人であった。また、ワクチン接種歴は、全て無しであった(表I-2-3)。

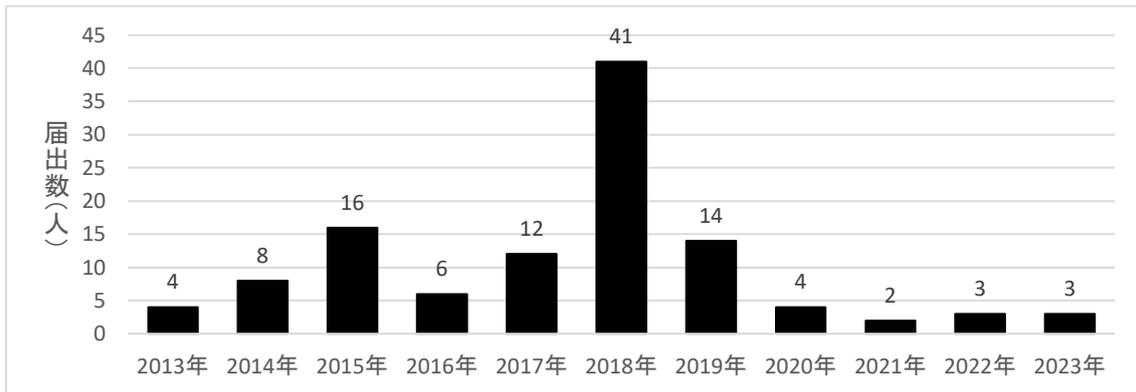


図 I-2-2 A型肝炎 届出数 (2013年~2023年)

表 I-2-3 A型肝炎 (n=3) の届出内容

診断日	性別	年齢	診断方法	推定感染経路	推定感染地域	ワクチン接種歴
2/3	女	50歳代	検体から直接のPCR法による病原体遺伝子の検出 血清IgM抗体の検出	不明	国内	無
2/13	女	20歳代	血清IgM抗体の検出	経口感染	国外	無
3/22	女	10歳未満	検体から直接のPCR法による病原体遺伝子の検出 血清IgM抗体の検出	不明	国内	無

ウ エムボックス

2023年5月26日にサル痘から名称変更された。前年までは発生がなかったが、2023年は男性5人の届出があった。症例の年齢は20歳代から50歳代に分布した。全例で類型は患者で、診断方法は核酸増幅法による病原体遺伝子の検出であった。また、全例で推定感染経路は接触感染(性的接触)で、推定感染地域は国内であった(表I-2-4)。

表 I-2-4 エムボックス (n=5) の届出内容

診断日	性別	年齢	診断方法	推定感染経路	推定感染地域
1/30	男	30歳代	核酸増幅法による病原体遺伝子の検出	接触感染(性的接触)	国内
3/23	男	20歳代	核酸増幅法による病原体遺伝子の検出	接触感染(性的接触)	国内
4/7	男	20歳代	核酸増幅法による病原体遺伝子の検出	接触感染(性的接触)	国内
4/28	男	50歳代	核酸増幅法による病原体遺伝子の検出	接触感染(性的接触)	国内
9/4	男	30歳代	核酸増幅法による病原体遺伝子の検出	接触感染(性的接触)	国内

エ オウム病

過去10年で4人（2015年、2018年、2019年、2022年）の届出があったオウム病は、8月に男性80歳代1人の届出があった。類型は患者で、診断方法は間接蛍光抗体法による血清抗体の検出であった。推定感染経路は不明で、推定感染地域は国内（県内）であった。

オ つつが虫病

前年発生がなかったつつが虫病は5月に70歳代の男性1人と20歳代の女性1人、12月に60歳代の男性1人の計3人の届出があった（図I-2-3）。診断方法はすべてPCR法による病原体遺伝子の検出で、推定感染地域はすべて国内（うち県内が2人）であった（表I-2-5）。

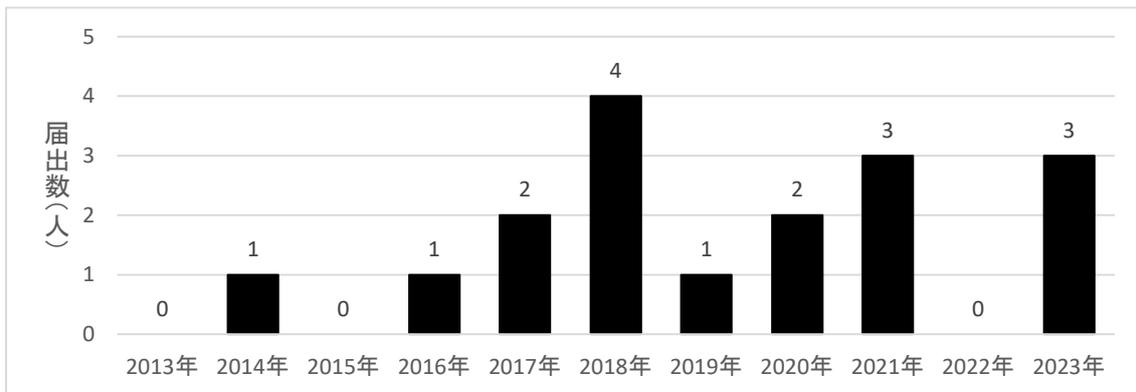


図 I-2-3 つつが虫病 届出数（2013年～2023年）

表 I-2-5 つつが虫病（n=3）の届出内容

診断日	性別	年齢	診断方法	推定感染地域
5/1	男	70歳代	PCR法による病原体遺伝子の検出	国内(県内)
5/17	女	20歳代	PCR法による病原体遺伝子の検出	国内
12/13	男	60歳代	PCR法による病原体遺伝子の検出	国内(県内)

カ デング熱

男性9人の届出があり、前年の2人を上回った（図I-2-3）。症例の年齢は10歳代から40歳代に分布した。病型は、デング熱が8人、デング出血熱が1人であった。診断方法は、非構造蛋白抗原（NS1）の検出のみが4人、PCR法による病原体遺伝子の検出及び非構造蛋白抗原（NS1）の検出が4人、PCR法による病原体遺伝子の検出のみが1人であった。推定感染地域はベトナムが3人、スリランカ、フィリピン、インドネシア、ネパール、インド、モルディブが各1人であった（表I-2-6）。

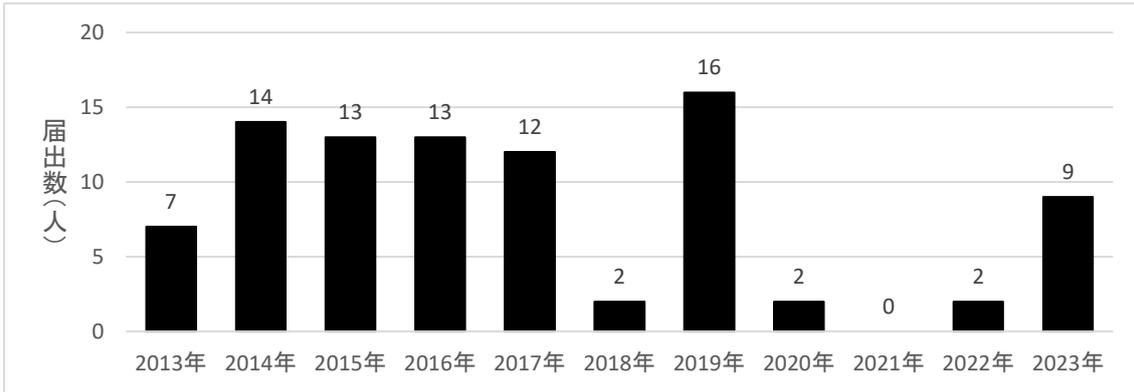


図 I-2-4 デング熱 届出数 (2013年~2023年)

表 I-2-6 デング熱 (n=9) の届出内容

診断日	性別	年齢	診断方法	推定感染地域
1/19	男	20歳代	NS1の検出	スリランカ
4/25	男	40歳代	NS1の検出	フィリピン
7/4	男	10歳代	PCR法による病原体遺伝子の検出	インドネシア
9/12	男	20歳代	PCR法による病原体遺伝子の検出 NS1の検出	ベトナム
10/03	男	10歳代	PCR法による病原体遺伝子の検出 NS1の検出	ベトナム
10/14	男	20歳代	PCR法による病原体遺伝子の検出 NS1の検出	ネパール
10/19	男	20歳代	NS1の検出	ベトナム
11/09	男	20歳代	PCR法による病原体遺伝子の検出 NS1の検出	インド
11/14	男	20歳代	NS1の検出	モルディブ

キ マラリア

11月に30歳代の男性、12月に10歳代の男性の計2人の届出があり、前年の2人と同数であった(図 I-2-5)。病型は共に熱帯熱であった。診断方法は、前者が血液検体の鏡検による病原体の検出で、後者は血液検体の鏡検による病原体の検出及び血液検体のPCR法による病原体遺伝子の検出であった。推定感染地域は前者がカメルーン、後者がタンザニアであった。

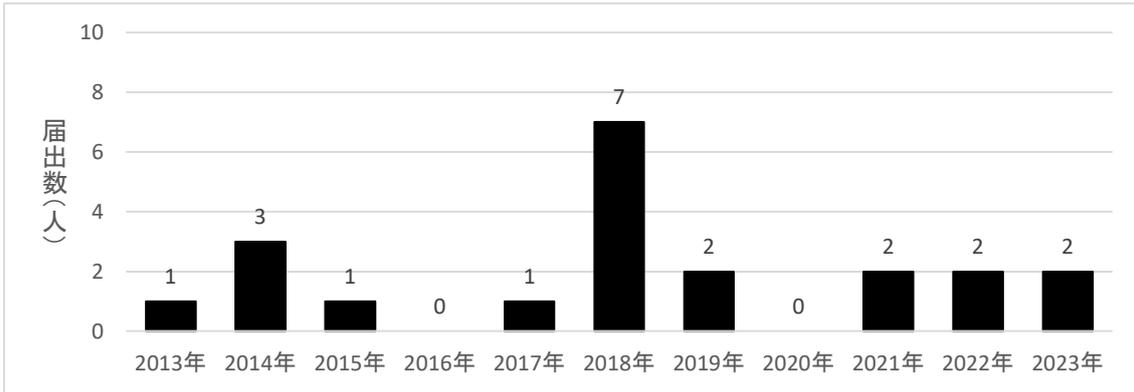


図 I-2-5 マラリア 届出数 (2013 年~2023 年)

ク ライム病

過去 10 年で 1 人 (2014 年) の届出があったライム病は、7 月に 30 歳代の男性 1 人の報告があった。診断方法はウエスタンブロット法による血清抗体の検出で、推定感染地域は国内であった。

ケ レジオネラ症

男性 96 人、女性 16 人の計 112 人の届出があり、前年の 96 人を上回った。症例の年齢は 30 歳代から 100 歳代に分布し、70 歳代が 35 人で最も多かった。類型は患者 109 人、無症状病原体保有者 3 人で、患者の病型別では肺炎型 106 人、ポンティアック熱型 3 人であった (表 I-2-7、図 I-2-6)。

年間を通して届出はあったが、6 月が 29 人と最も多かった (図 I-2-7)。

診断方法は、酵素抗体法またはイムノクロマト法による尿中抗原の検出が 104 人、PCR 法または LAMP 法による病原遺伝子の検出が 21 人、分離・同定による病原体の検出が 16 人、蛍光抗体法による病原体抗原の検出が 3 人、マイクロプレート凝集法による血清抗体の検出が 1 人であった (重複例有り)。推定感染地域は、国内 94 人、不明 18 人で、国内感染例のうち県内は 72 人であった。

表 I-2-7 レジオネラ症 年齢階級別届出数

年齢階級	男性	女性	総数	割合
10歳未満	-	-	-	0.0%
10歳代	-	-	-	0.0%
20歳代	-	-	-	0.0%
30歳代	-	1	1	0.9%
40歳代	7	-	7	6.3%
50歳代	20	1	21	18.8%
60歳代	16	1	17	15.2%
70歳代	32	3	35	31.3%
80歳代	16	7	23	20.5%
90歳以上	5	3	8	7.1%
合計	96	16	112	100.0%
割合	85.7%	14.3%	100.0%	

(-:0)

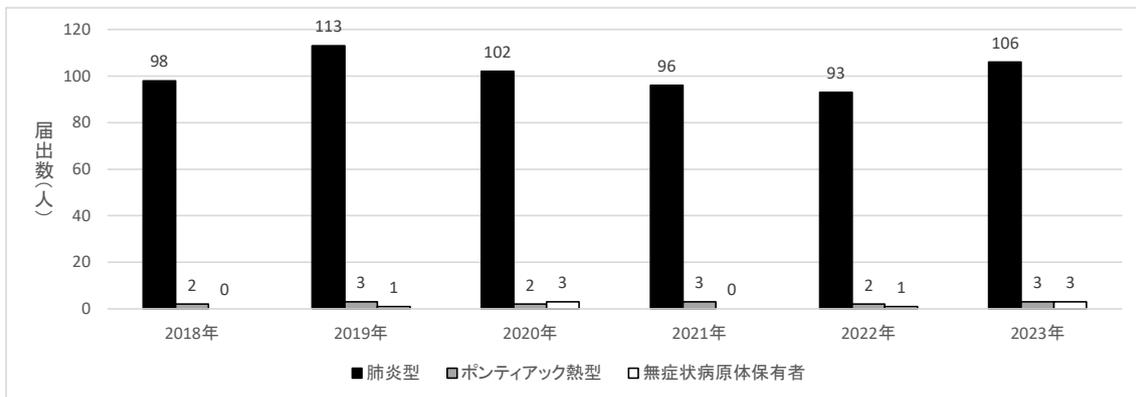


図 I-2-6 レジオネラ症 病型別届出数 (2018年~2023年)

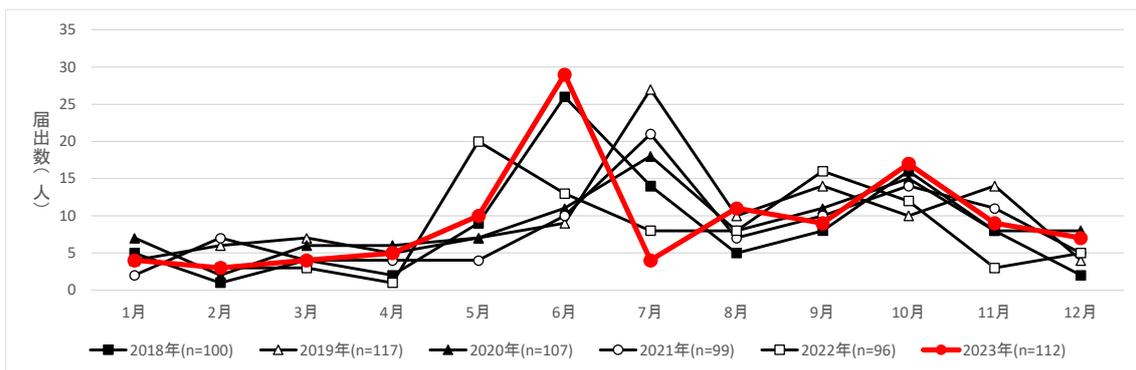


図 I-2-7 レジオネラ症 月別届出数 (2018~2023年)

2) 四類感染症の病原体検出状況

ア E型肝炎

22例 29検体が採取され、11例 14検体からE型肝炎ウイルスが検出された(表 I-2-6)。遺伝子型は、G3が7例、型別不能が4例であった。ウイルスが検出さ

れた全症例に海外渡航歴はなかった。

イ A型肝炎

2例2検体が採取され、2例2検体からA型肝炎ウイルスが検出された(表I-2-8)。遺伝子型は、IA及び型別不能が各1例であり、IAが検出された症例ではコロンビアへの渡航歴があった。

ウ エムポックス

6例21検体が採取され、5例19検体からエムポックスウイルスが検出された(表I-2-8)。

エ 重症熱性血小板減少症候群 (SFTS)

3例3検体が採取されたが、ウイルスは検出されなかった(表I-2-8)。

オ つつが虫病

12月に採取された1検体からつつが虫病リケッチア(*Orientia tsutsugamushi*)遺伝子が検出された。

カ デング熱

8例8検体が採取され、5例5検体からデングウイルスが、2例2検体から非構造蛋白抗原(NS1)が検出された(表I-2-8)。デングウイルスの遺伝子型は3例が2型、2例が3型であった。全症例で海外への渡航歴があった。

表I-2-8 四類全数把握対象疾患のウイルス検出状況(2023年)

臨床診断名	採取月 検体合計数	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	累計	その他のウイルス
E型肝炎	検体数	7	2	9	12	9	4	3		8	2	5	2	63	
	E型肝炎	5	1	5	2	8	2	2		1		1	2	29	
A型肝炎	検体数	4		3	2	1	1	1		1		1		14	
	A型肝炎		1	1										2	
エムポックス	検体数	1		3	9					6		2		21	水痘帯状疱疹(1)
	エムポックス	1		3	9					6		2		19	
重症熱性血小板減少症候群	検体数					1		1				1		3	
	SFTS					1		1				1		3	
デング熱	検体数	1			1		2			1	2	1		8	
	デング	1			1		2			1	2	1		7	

キ マラリア

12月に採取された1検体から熱帯熱マラリア原虫(*Plasmodium falciparum*)遺伝子が検出された。

ク レジオネラ症

埼玉県内で分離された *Legionella pneumophila* は21株(血清群1:20株、血清群2:1株)であった。また、菌は分離できなかったがLAMP法のみ陽性を示したものが7件あった(表I-2-9)。

表 I-2-9 レジオネラ症 病原体分離状況 (2023年)

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計
<i>Legionella pneumophila</i> SG1	1	1	1	1	1	5	-	2	1	5	2	-	20
<i>Legionella pneumophila</i> SG2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1
<i>Legionella</i> spp.(LAMP陽性)	-	-	-	-	-	2	-	1	1	2	1	-	7
計	1	1	1	1	1	7	-	3	2	8	3	-	28